

月刊

# いじろのとも

第三卷

十月号

## 自然保護

自然保護

己が乱して

おきながら

いまさら保護とは

それや何のこと

保護しても

滅びるものは

滅び行く

人の力で

出来ると思うな

人間の

傲慢感ず

この言葉

保護する前に

壊すのやめろ

## 人間執着・花無心

道端に

踏まれし草も

無心に咲く

何故に人間

執われに散る

## 何はなくても安心

よき家も

お金も地位も

食べ物も

何はなくても

安心ぞある

# ひとりで悩みたくない人は

九、人には愛情をあげるようにすること。

少し理屈っぽくなりますが、このテーマの愛情をあげるとはどういうことを説明するために、私が考えている人間「精神」の心理学モデルを挙げさせて頂きます。

人間「精神」の心理学モデル

自己のモ ーメン	他己のモ ーメン	固有な機能
自我	人格	統合性〓目的性〓一貫性
認知	言語	知能〓知識の創造と蓄積(口)
感覚	運動	技能〓外界への適応行動(身)
情動	感情	通心〓内界の心的な処理(意)
個人的 無意識	集会的 無意識	個人の遺伝形質と生の衝動 人類の共有する無垢なもの

なじみの薄い言葉がられつしてあって、びっくりされるかも知れませんが、考えていることは人の理解を越えているものではありません。どなたにでもご理解頂けます。しばらくお付き合い頂けたらと思います。特に難しいと思われる言葉は、モーメントという言葉ではないでしょうか。この言葉はドイツのヘーゲルという哲学者によつて特に有名になつた「弁証法」という、矛盾を含んだ運動現象を捉える論理学で大切な用語です。日本語では契機と訳されています。この矛盾を含んだ運動現象ですが、卑近な例で言いますと、私たちは今、生きていると思つていますが、実は死の方から見ますと一瞬一瞬死に向かつて突進しているとも考えられます。一日生きたことが、一日死んだことになっています。この生と死を人生という運動のモーメントと呼ぶわけです。

こういう「生きていることは、実は死んでいることである」と言うように、生から死への運動を捉えようと思ひますと、普通の形式論理では「生は死である」というように矛盾した論理命題となるわけです。現象の方から逆に言いますと、現実が矛盾を含んでいるから現象として運動せざるを得ないとも言えます。生と死という矛盾があるから人生として運動すると思えるわけです。このように、形式論理では矛盾になつてしまつて捉えられない

いものを捉えるのが、弁証法なのです。

私たちは、いま生きている、いやもつと生きていたいと思うのに死ななければなりません。これが、人生が含む最大の矛盾です。苦しみです。この苦しみのために人はどれほど愚行をなし、過ちを犯すか分かりません。でも、これは有限で、時間的で、相対なものの定めなのです。誰もこの定めを逃れることは出来ません。どんなに栄耀栄華を究めた者でも、必ず死んでいかなければなりません。皆が平等です。誰でも生まれて死ぬのです。ここに人間の根源的な生きる真実があります。

ですから当然、私たちの心の中にもこの人間の存在の有り方が、反映しています。それを捉えようとするのが、冒頭に示しました、モデル（考え方）なのです。

いま述べましたように、人間は相対的です。このことは文字通り「あいたいして」いることを意味しています。無限で、永遠で、絶対なものは、「たいすることを絶して」いますから、それ自身で存立することが可能です。でも、相対な者は、自分で孤立して存在することは出来ません。必ず、自己が否定される者と相対して存在せざるを得ない運命にあります。しかし、否定されるだけではなく相対することのもう一つの真実は、相対するものによって支えられて存在しているということです。つま

り、自分と他人とが相互否定するだけではなく、お互いが相互依存しながら存在しているのです。否定と肯定の矛盾の中に生活しているのです。

こう考えて来ますと、それはさきほど述べました、生きていたいののに、死ななければならぬのと、同じ構造になっています。自分を主張したいのに、他人もそうしたがついていて、それを認めれば自分が否定されてしまいます。ここに自己と他己との葛藤が起こります。自分がすることや言うことは、いつでも正しいと思いたい。しかし、他者から見ればそれは自分に執わられていて、間違っている。でも、自分に執わられているので、そのことすらが分からない。たとえそれを人に指摘されても、指摘する方が悪いと思ってしまう。難儀なものです。

このように、自己を主張しようとするほど、人間は他者が自由にならないことを感じてしまいます。自分と対立していることを、つまり自分を否定していることを強く感じてしまうのです。しかし、よく考えてみると、そうした自己主張は相手がそれを受け入れて、相手は自己主張しないことを期待しています。自分の執われを相手にぶつけて非難しても、それを受け入れてくれることを期待しています。つまり、相手から愛情をもらうことばかり考えているのです。しかし、こうした関係が

続けば続くほど、その人は自分の実存の構造に気付くことは出来ません。ますます、わがままになって片意地に自己を主張しようとし、仏や神、あるいは人の道からどんどん遠ざかって行くのです。現代人の多くがそうなっているように思われます。

こんな人が多くなりますと、世の中は、愛情をあげないのに自分だけは欲しがる人であふれて来ます。それは社会全体がどんどんエゴイステックに成って行くことを意味しています。それは、社会の崩壊に近づく道です。仏や神の道から縁遠い世界になって行きます。

ですから、この社会をよい社会にして行こうと思いませんと、自分ばかりを主張するのではなく、自分が主張する以上に、出来るだけ相手を受け入れて行かなければなりません。つまり、愛情をもらうのではなくて、出来るだけあげるようにしていかなければならないのです。

五月号で述べましたように、孔子は「仁」という言葉でこれを表し、自分の教えの中心にすえています。自分の我を殺して、人の為に尽くす。そのことを説いているのです。自分の我とは、自分の金銭欲、財産欲、名誉欲、優越欲、食欲、性欲のような欲望や、恨み、妬み、腹立ち、衝動などの心の動きなどです。

始めにあげたモデルで言えば、「感情」の働きとして、

「人の心を感じる心」を持ち、他者の痛みが我が痛みであり、他者の喜びが我が喜びとなるようめざして、他方では自分の欲望や心の動きである「情動」を制御して行く。この弁証法的統合の中にわれわれの精神生活の一つの機能領域が存在するのです。

自分が人で悩みたくなければ、どこまでも人に愛情を捧げて行く。自分を殺して、どこまでも相手のために何かをさせて頂く。そのことを決して恩に着せない。してやっているととは思わない。してやっているとせば、それは自分のために行っているだけになるのです。相手のためにしているわけではありません。かけひきをしているだけなのです。自分ができることを出来るだけさせて頂いて、決して恩に着せない。そのことに執われない。

しかし、こうはなかなか出来ないものです。こう出来るようになるには、自我・人格の働きがいります。そうなりたいたと、ひたすら願う心がいります。それは「たましい」の世界のことに属します。モデルで言う、自我・人格の働きなのです。人格の働きは、私たち人間を否定し、かつ肯定する他者の最高のもの、絶対他者を実感する働きであり、自我の働きは、「修行」することによって自己こそが絶対なもの存在形態だということを知る働きです。仏教でいえば、悟りとか解脱と言える心を得

る働きです。釈尊がお生まれになってすぐ七歩あるかれて「天上天下 唯我独尊」とおっしゃったことに当たっています。この悟りや解脱に達するとき、自我と人格の働きは統合されて一つのものになるのです。自分の生き方の追求が、他者のために生きることと等しくなるのです。

でも、難しいのは、じつと「かくありたい」と思い続けることと、仏さまとかけひきしないで、ひたすら「修行」することです。これほど修行したのだから、もう解脱が訪れるはずだとか、もうそうなっているはずだとか思わないことです。ただ、ただ、ひたすら「自己完成」を目指して、修行することです。

それと同時に、自分は今日一日、他者のことを思っている行動したか、愛情をもらうのではなく、あげるようにしたか、自分のなすべきことをなしたか、自分の統制が出来たか、毎晩反省してみることで、毎日、毎日反省してみることで、必ず自分の限界が見えてきます。そうならば、他者に対してやさしくしなければという思いがわいてきます。そして、もっと自分が自分で統制できるようにならなければと思えるようになって来ます。もっと、自分がしっかりするために、「修行」しなければと思うようになってきます。

## 自作詩短歌等選

### ベールブルースの戒め

ベールブルースに  
野球と人生を  
教えてくれた  
神父さんの  
戒めの言葉

これは  
多くの人にも  
当てはまる  
特にどこかの誰かに  
びつたりだ

戒めたい  
戒めたい  
戒めたい

君には三つの欠点がある

コスモス

食べ過ぎること  
怠けること  
すぐ腹を立てること  
ぜひ克服するように

秋の風  
感ずる季節  
街道の  
誰ぞ植えしか  
コスモスの花

## 井の中のかわず

井の中の  
かわず大海  
知らずとや  
もつと言うなら  
井の中知らず

日本語しか  
知らない人は  
日本語さえ  
知らずと言うと  
同じたとえぞ

相対者  
相対するもの  
なきときは  
自らのこと  
分からざりけり

自らを

善き人なりと  
思うほど

自らのこと  
分からぬがごと

相対者

おのれ知るには  
おのれ捨て

ただひたすらに  
あるがままあれ

## こころ貧しき者

世の中に  
自分えらしと  
思うほど  
こころ貧しき  
ことなかりけり

## 同化と異化

欲張れば  
欲張るほどに  
枯れていく  
こころの中の  
幸せの泉

与えれば  
与えるほどに  
押し寄せる  
こころの中の  
満ちたりし波

捨て去れば  
捨て去るほどに  
輝ける  
こころの中の  
みたまの光

取り込めば

取り込むほどに  
こびりつく

こころの中の  
執われの垢

## いのししの畑荒し

いのししに  
いもを掘られて  
途方にくれ

いのししの  
残しし芋を  
急きよ掘り

いのししの  
食べ残したる  
いもうまし

## 自作随筆選

## 自由・平等・友愛

フランス革命（1789 - 1799）の標語とされた言葉に自由、平等、友愛があります。この言葉はある意味では、現代にも示唆を含んだとてもいい言葉だと思いますので、私なりの解釈を試みたいと思います。

「ひとで悩みたくない人は」にあげました、私が提唱する人間の精神モデルでは、人間の精神の働きは、「自己」つまり個人の生き方を追求していく側面（自己モメント）と「他者」つまり社会を尊重する側面（他己モメント）との弁証法的な統合の中に存在しています。具体的にいいますとそれは「私（我）」とあなた（汝）」を統合する生き方の中に働く、人間らしい働きのことなのです。人間の精神の本質的特徴は、他の動物と違って自分のことだけを考えるのではなくて、他者のことも考えられるところにあります。それが、他の動物と違った人間らしい、この世での存在形式だと私は思うのです。人間の本質を知性（つまり言葉）に求める考え方が、今の世界の主要な考え方だと思えますが、そこからは、「人間は万物の霊長」といわれるような人間の傲慢さしか出てこないように、私には思えるのです。そこでは、「個の確立」と言われるように、どうしても人と自分の

差異にばかりに目が行き易いように思えるのです。どうしても自己中心になりやすいように思われるのです。

さて、前置きはこのぐらいにして、この精神モデルにフランス革命の標語の自由、平等、友愛を当てはめて解釈してみたいと思います。

自由は、当然、個人の自由ですから、精神モデルで言えば「自己」の側に属します。ですから、もしこの人間が持つ自由ばかりを強調しますと、最後には人を殺す自由すら出て来そうです。死刑は、処刑の自由として、その一つの形態だと思えますし、戦争も「自己」の正義の名の下に「他者」を殺す自由を認めているのだと思うのです。どこまでも、そこでは自己主張が優先します。自分の国の正義や、法律や、言い分の主張が優先してしまいます。ですから、自由だけを主張し過ぎますと、人間同志の争いの世界、修羅場が待ち受けているのです。それは、核兵器の存在する今、人類の滅亡を意味しています。私の精神モデルの、自他の統合の中に人間の存在形式がある、とする考え方に反しています。

こうした人間の戦いを避けるために、最後に挙げられる友愛があるのです。これは勿論、「他己」の側に属します。それは精神モデルで言えば「人の心を感じる心」である感情の働きと、人の道に従って生きていこうとす

る「人格」の働きとに關係しています。中国の孔子の言葉で言えば「仁」に当たりります。

ヨーロッパでは「人格の尊嚴」とか「生命の畏敬」とか言つて、人間や生命の大切さを強調しますが、それらはここで述べている友愛が含まれていなければ、空しいものになります。人格の尊嚴は即自分の尊嚴であり、生命の畏敬は即自分の生命の畏敬であるに過ぎなくなつてくるのです。それは、これまでの世界の歴史が証明済みなことだと言えます。ただ、きれいごととして言うだけのものになります。人格の尊嚴は自分の人格であると同時に、他者の人格でなければなりませんし、生命の畏敬は自己の生命であると同時に他者の生命であり、あらゆる生き物の、否、物の生命ですらなければなりません。こうした自己の自由と他者への友愛とを統合して、同時に成り立たすものが、実は平等という言葉なのです。この言葉はもともとは人間の価値がどんな人も等しいとするところにあるのですが、具体的には近代民主主義の政治理念としての平等で、一人ひとりの投票の平等と考へられます。しかし、ルソーを始祖とする個人主義において自由と対比される平等では、幾ら個人は等しいと言つてみても、生まれも能力も親の経済的な豊かさも皆違ひます。この世は、それらによつて人間の価値に差異を

認めています。それを強調する教育すらがこの国でも行われているのです。

友愛のない自由が空しかったように、個人主義に基づく平等は、現実の個人的不平等を認めるものであり、極めて空しいものなのです。自由と友愛を統合するどころか、人間の相対的差異により人を差別する自由になりさがり、自分が相対的に優位にあるとき、その優位を保てる範囲で余分なものを恵んでやる友愛にすぎません。自己を犠牲にしても他者のために尽くそうとする真の友愛ではないのです。ここにヨーロッパで、この自由、平等、友愛がささやかれながら、言葉だけに終わっている理由が存在するのです。

個人の自由と社会の維持を目指す友愛とを統合する真の平等は、われわれ人間の相对比较を打ち消したところにあるのですが、それを投票の平等という極めて人間的な相対的行為のみ実現させようとしたところに、現に存在する人間の相対的不平等を解決することが出来ない最大の理由が存在するのです。『世界人權宣言』に「すべての人間はその尊嚴と権利において自由且つ平等である」とうたわれているにもかかわらず、差別や貧富の差は依然解消されていないのです。

私たちは、ここに相対なものを超えたものを仮定せざ

るを得ないのです。相対的存在を超えたもの、それを「超越」と呼ぼうと「絶対者」と呼ぼうと、「神・仏」と呼ぼうと、どうでもいいのですが、そうしたものが、とにかく私たち人間を始めとする「生命」や「物」を、相対的で時間的で有限なものとして存在せしめていると考えるのです。そしてそれは、絶対で永遠で無限なものであると考えるのです。

ヨーロッパ哲学では、これはいわゆる「形而上学」と呼ばれる領域に属するもので、実証を超えているとされていますが、インドを始めとする東洋ではいろいろな修行法を通じて実感できるものとされています。そういう宇宙根源の原理と自己が一体となる体験をすることが可能であると考えられているのです。そのとき、宇宙根源の原理は前に述べた「他己」の最高のものであり、それを実感する個人は釈尊の述べられている「天上天下 唯我独尊」と呼べる絶対自己の自覚へと到達しているのです。こうした体験によって始めて自己と他己が絶対に等しいものであることが、実感できるのです。こういう体験なくして、他者と自己が等しいと幾ら口で言ってみても、空しいものに終わってしまうのです。

あたま（認知・言語機能）だけを重視したこれまでのヨーロッパ思想の限界がここに露呈されています。から

だところとあたまを一体とした修行がいます。それによって、誰でもが、あるいは「生命」や「物」もみなが等しいものであると実感できるのです。

ここにフランス革命の標語の自由、平等、友愛が真に三位一体となって、世界の平和とあらゆる人の解放が実現されて行くのです。

## 釈尊のごとば（六）

法句経解説

（二三）（道に）思いをこらし、堪え忍ぶことつよく、つねに健（たけ）く奮励する、思慮ある人々は、安らぎに達する。これは無上の幸せである。

（二四）こころはふるい立ち、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、みずから制し、法（のり）にしたがって生き、つとめはげむ人は、名声が高まる。

この二つの偈（詩）に共通している文章構造は、「これこれする人は、こうこうなる」というものです。先に

後半の「こうこうなる」の方からみてみたいと思います。

(二二二)は、安らぎに達し、無上の幸せを得る、です。また、(二二四)は名声が高まる、です。(二二三)は、仏教の究極の目的である、解脱に至って、心の中に外的などんな出来事にも左右されない、命がなくなることによってさえも左右されない、絶対な幸せを築くことが出来るというものです。そして(二二四)では、さらに名声も得られるということです。

皆さんもそうなりたいとは、思われませんか。釈尊は誰でもがそうなる道を説いておられます。でも、それは「これこれする人は」というその内容を守っていれば、なのです。そのことを検討して行きたいと思えます。その前に、ここに出て来た「名声が高まる」という言葉に抵抗をおぼえる方のために一言述べておきます。それは、結果としてそうなることがある、ということですが、それを人生の目的にしてそれに執われてはなりません。釈尊は、対機説法と言いまして、人を見て法を説かれました。解脱していない、俗な名利を目指して生きている大多数の人に説法をするのですから、その俗な欲望を駆り立て、修行への動機付けとしても、それが悪いと非難するのは的外れというものです。そんな言葉に執られるようでは、釈尊を信仰しているとも言えませぬし、幸せにな

ることもありません。

さて、「こうすれば、幸せになる」という文章の前半の内容について見てみたいと思います。どうすれば善いのでしょうか。それはもうこれまで、この「このころ」とも」を読んでこられた方なら、十分お分かりだと思えます。一つずつ見ていきたいと思えます。

まず、(二二三)と(二二四)の最初の出だしのところを見ますと、それぞれ「道に思いをこらし」と「こころはふるい立ち」と出ています。これはどちらも、人の道を求める心の強いことを言っています。動機や意志が強いことを言っているのです。それを示すエピソードの一つとして有名なのは、禅宗の初祖達磨(だるま)大師に、二祖慧可(えか)が教えを請いましたが、いれられず、雪の中に立つてひじから先を切断して差し出し、こころざしの固さを示して入門を許された、というのがあります。やすやすとは弟子にしなかつた達磨大師の厳しさとそれでもひたすら仏道を求めて止まなかつた慧可の気迫のすごさが伝わって来ます。誰でもこれほどの強さで仏道を求めることは出来ないと思いますが、この話を聞いて少しでもあやかりたいと思えます。

では、どうしたらこれほどの強い意志を持つことが出来るのでしょうか。それには、いろいろの条件があると

思いますが、一つには自分の限界に気付くことです。自分が偉いと思えば思うほど、仏道など求める気にはなりません。自分が墮落していることさえ気付きません。ですから苦勞がいらいます。自分を否定する契機がいらいます。死とか病気とか老いるとかです。あるいは自分の生まれについての悩みです。あるいは自分の人生が自由にならないことの悩みです。

もし、昔の中国の王様のように、近隣を自由に征服し、誰でも自由に命令して動かせ、好きなものを世界中から取り寄せて食べ、美しい女性だと思えば誰でも側室にしてその数二〇〇人にも及びますと、仏の道からはほとんど遠ざかって行きます。自分の好き勝手に何処までも通用するわけですから、自分の限界なんか感じると言われてみても、それは無理なのです。なんだか現代人のようです。でも、死にたくはなかつたようで、あがきながら死んで行きました。何百人も殉死させ、多くの人形を作って墓の回りにまで埋めさせました。馬鹿馬鹿しくて、愚かしくて、不幸な話です。

ですから、いま悩みのある人は救われます。いま悩みのない人はもつと悩みを持って下さい。そして、もつと絶対な幸せを心の中に作り出すために、次に述べる修行をして頂きたいと思えます。

前にあげた偈を、もう一度見てみたいと思えます。堪え忍ぶことは「忍辱」のことです。健く奮励する、つとめはげむとは、「精進」のことです。思慮ある、思いつつましくは「智恵」に関係しています。(二四)で残った、行いは清く、気をつけて行動しは、「持戒」のことです。みずからを制し、法にしたがって生きるは、六波羅蜜には該当する項目はないようです。十善戒では、不慳貪、不瞋恚、不邪見に当たっています。私の心理学モデルでは、情動・感情と自我・人格の働きのことです。

六波羅蜜については既に何度も述べて来ましたが。それは、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智恵の六つです。つまり、人には施しを心掛け、十善戒のような戒律を守り、ここを制御して人に耐え、理想を持ち実現するよう努力し、ヨーガや読経などの修行に励み、仏の智恵を与えることを目指すのです。

今回はすこし難しい言葉が多くなつたかも知れませんが。でも、大切なことは毎日まいにち、ヨーガをすることです。座禅をすることです。正座してじつと瞑想するだけでも結構です。必ず毎日して頂きたいと思えます。必ず、生きる喜びが湧いてきますから。

後記

一、俳句にもうたいましたように、いのししにさつまいもを荒らされました。全部で数畝しか植えていないのですが、九十パーセント以上食べられました。今年は、いもを主食にするには、どう貯蔵し、どう加工し、どう食べればおいしいか、などを試そうと思っていたので、昨年の倍ほど植えていたのですが、いま手元にあるのは、かご一杯ほどです。農協にきいても、役場にきいても、へいをするぐらいいしか事前に防ぐ方法はないとのこと、困ってしまいます。へいをすればコストが高くなり、買って食べた方がずっと安くになります。また、トウモロコシは「はくびしん」にやられます。これも決め手になる被害防止策はないようです。

二、山の農業もなかなか引き合いそうにありません。一口として農業をやるつもりはないのですが、これほど被害がありますと、自給自足の農業でも不可能のように思われます。少なくとも、さつま芋は作れません。獣害や鳥害、風水害だけではなく、なにせ耕地はすべて急傾斜地で、大型農業機械は使えませんから、省力化は無理です。自分の手足を使ってやって、被害に合わないで、畑作だけで、主食を含め自給自足できる作物はとも限られてくるように思われます。特に、ここが部落の一番高

いとここに位置しているからだとは思いますが。

三、この心光寺への引き込み道路をとれる、かんばつ林道の工事が始まりました。山の道路は、工事費の自己負担があり、用地は山や狭い畑を無償提供ということで、道路を通すにはいろいろと利害がからみ、これまでにそれぞれの「エゴ」のぶつかりあいがあったようです。「無理が通れば道路が引つ込む」かな。「仏さま」や神さまは何とお思いになられることやら。

四、今年は、異常気象でしょうか。九月の初め猛烈に暑かったのですが、下旬には急に寒くなりました。わが家では九月二十日にこたつを出しました。お元気で。

月刊 こころのとも 第三卷 十月号 (通巻 三十四号)	平成四年十月八日(縁日は、毎月 〒7779 53 八日十時より) 徳島県三好郡山城町国政八三四 ひびきのさと(清心者寺院)心光寺 (沙門)中塚 善成 <small>じょうせい</small>
心光寺 口座番号 徳島9 53708	本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 清心者寺院

